ライチョウの剥製

長野県下に生息するライチョウは、約2万年前に大陸から移り住み、その後中部山岳に取り残された集団で、世界のライチョウの中で最も南にすむ亜種です。

国の天然記念物に指定されており、20年ほどの前の調査では日本の生息数は3000羽に満たないとされています。北アルプスにはそのうちの66%が生息しているとされます。

また、中央アルプスや白山では絶滅したとされていましたたが、白山では2009年に再確認され、北アルプスから飛来したものであろうと考えられています。

科学館のライチョウ剥製は、「雷鳥」 矢沢米三郎著　岩波書店発行の口絵写真や図版の元となったものです。多くが北アルプス産で、明治末から昭和の初期に採取されています。季節に伴う換羽状況がわかるもので、大変に貴重であると考えられます。また、成体の骨格標本や千島産の本剥製は他に類がないものです。

これらは旧教養部に長い間保管されていたのですが、やっと日の目を見る機会が訪れたと考えています。作成時から80年以上経過しており、白いはずの冬のライチョウが黒くなっていたり、羽が抜けそうになっていたりしますが、今後修復してゆきます。

ライチョウの卵

ライチョウの親子　(子どもは死にました)

千島のライチョウ

ライチョウの骨格